



幽霊愛書会

tontokaimo39

はじめに

幽霊、といっても墓場などに現れるあの足の無い人達ではありません、ここでは赤川次郎氏のミステリー「幽霊シリーズ」についてのあれこれを。

あの偉大な名探偵シャーロック・ホームズにはシャーロキアンといわれる人達があります、それなら愛すべき名探偵永井夕子にもユーコジアン！？が、

シャーロキアンは世界中にいて、ホームズ愛好家の団体もまた数え切れないほど、対しててユーコジアンによる「夕子愛好協会」会員は今のところ二人だけ（それは私と...会員大募集！笑）

次の二点をおことわりしておきます。

シャーロキアンは生みの親コナン・ドイルを無視して、全ての事件を現実のものとして扱います。ユーコジアンにも往々にしてその傾向があります、そのために赤川氏に対して失礼があるかも知りません。前もってお詫びしておきたいと思います。

全ての事件は、読者既読のものとして扱います、そのために未読の方に対しては”ねたバレ”になることがあります、できるだけ避けたいのですが、もしそうなっていても、これはお許しください。

同じ赤川氏のミステリーでも、「三毛猫ホームズ」には愛好会もあるし、マニア本も出ているのですね。だけど私はやっぱり猫より若い女性の方が...笑

「幽霊愛好会」にしたかったのですが、これはもう「聖典」？にあるのですね、「幽霊愛書会」はまだ無かったと思うのですが。

なお、文中に出てくる方々の敬称は省略させていただきます。

幽霊探し

幽霊探し

赤川次郎氏の作品に最初に出合ったのは、原作ではなくて、実はTVドラマの「幽霊列車」田中邦衛の宇野警部と浅茅陽子の夕子だ、これは面白かった。とはいうものの偶然見たもので、2作3作と放映されたことは知らなかった、また原作を、読みたいと思ったわけでもない。ミステリーは好きでよく読んでいたが、当時は専ら海外物、ブロンジーニの「名無しのオブ」などが好きだった。

定年退職、読書の時間は余るほど取れるようになったものの、老眼というおまけがついてきた。もう一晩で一冊などという芸当はできない。

「何か気軽に読める短編でも、電子書籍なら、文字の拡大もできるそうだし。」
とパソコンで遊んでいて出合ったのが「幽霊列車」、面白い、筋はドラマで知っていたのにもかかわらず。

「これなら、2冊目3冊目も...」

ところが、電子書籍というのは、便利なようでそうとは限らない、あっちに3冊こっちに2冊と散ばっていて、同じサイトに纏まっているのではないのだ。(どうやらこれは、出版元との関係らしい)ある書店に無ければ別書店で探す、これだけなら普通の本と変わりはないが、電子書籍となると、それだけでは済まない、いちいちユーザー登録、そして専用ソフトのインストール。「おいおい、いくつ入れたら何でも読めるようになるんだ、これじゃあパソコンがパンクしてしまうじゃないか。」

というわけで、電子書籍はあきらめて、今度は古書を探してみた、そこでぶつかったのがある古書販売サイトの”大人買い”

「何だ？」

要するに、シリーズ物をまとめて買えば格安になるというもの、そこで「幽霊シリーズ」と検索すると、あったあった、「全22冊、不足3冊」価格は1冊あたり150円程度。

「これなら手ごろだな」

というわけで、19冊の文庫本が手元に届いた。

「これで当分暇つぶしが」

ところが、人間の心理(いや私だけか)は不思議なものだ、不足3冊がどうしても気にかかる。

「ここまで揃ってるんだ、やはり残りも...」

と、今度は地元の古書店や新古書店を覗いて見た、あるある、何しろ赤川氏の本は500点に及ぶというのだから、ところが甘くはなかった、赤川氏の本は、ずらりと並んでいても、肝心の3冊が無い...そこで再びネット書店へ。

「揃った、全22冊！

ところが、ところがである、何気なくパソコンで「幽霊シリーズ」を検索すると、そこには”全23冊、さらに番外もある”というではないか。そこで再び古書探し、ある古書店で、番外3冊は見つけた、しかし23冊目「幽霊注意報」というのが見付からない。

「そうか、これは新しいのだから古書店では無理か...」

どこの書店でも、大抵文庫本は出版社別、その中で赤川ならトップ、見つけるのは簡単だろうと思ったのだが...

「無い、無い...」

A書店にもB書店にも、さらにさらに、CにもDにも...「声はすれども姿は見えぬ...いや、名前はあれども姿は見せず、正に幽霊...」

このミステリーは、馬鹿らしいほど簡単に解けた、ある書店で、ふと見たノベルズの棚に、なんとすまして鎮座しているではないか、何のことは無い、まだ文庫に入っていないだけだ。”全22冊不足3冊”というのも文庫本では、というなら間違いではなかったわけだ。



「よし、今度こそは全作品を揃えたぞ！」

ところがそうは行かなかった、「オール読み物」の新聞広告、執筆者の中に赤川次郎とあるではないか。

「さてよ、幽霊シリーズはみなオール読み物に掲載されたはず、もしかして...」

と、書店に急いだ、一冊だけ残っていた雑誌を開くと、いたいた、夕子も宇野警部も。(2013年2月号)

「となると、昨年のオール読み物にも何作かは掲載されたはず、しまった！」

が、これは「幽霊注意報」に載っていることがわかって一安心。今度こそ、全作品が揃ったのだ！

実は幽霊探し、まだこれで終わらないのだが、それは後ほど。

幽霊列車

これが「幽霊シリーズ」の第1号、それだけではなくて赤川氏のデビュー作。（1976年度オール読み物推理小説新人賞受賞作品）

ミステリー小説に欠くことができないもの、謎（事件）、それに対する合理的な説明（解決）、そして人間（登場人物）という文を読んだことがあるのですが、「幽霊列車」はこの3点をきちんと押さえた模範的な作品、なかでも人間というのがユニークで警視庁捜査一課、39歳の宇野警部と21歳の女子大学生永井夕子のコンビですね。

連作短編というのはどこから読んでもいいのですが、まだ未読だがこれから読んでみたいという方は、まず最初にこの「幽霊列車」を読んでいただきたいと思います、数編読んだけどこれはまだ、という方も是非。

いつも皮肉を言って宇野をからかう夕子、これだけだと夕子というのは嫌味な女という印象を受けませんか、実は二人の間は、互いの愛情で結ばれている、だから夕子の皮肉も、冷笑ではなくてユーモアとして笑うことができる、それがわかるのがこの編なのです。（短編ですから、詳しくというわけではないのですが。）

「貨車で何してた？」

「ハンカチ貸してくれる？」

このトンチンカンな答え。

「ご一緒していいでしょ」

と、初めて会った男の部屋へさっさと自分のお膳を運んでくる突飛な夕子の振る舞い、これは伏線でもあるのですが（というとなねたバレか）宇野が警察官だと知った夕子の挑戦でしょう。宇野は「素人の推理など...探偵ごっこか」と馬鹿にしているのですが、実は「ヒントは出したわよ、後はお手並み拝見」と夕子に試されているのです。

「ね、宇野さんだったわね？ 刑事」

「警部」

「あら、偉いのね、見かけによらず」

一言余計だ。

これこそ夕子の本領。

と、これだけ勝気な夕子でも

「...タバコもらえる？」

「僕が親ならタバコなんかよせ、と怒るところだ」

「うるさい親がいないせいで、このざまよ」

...

「お子さんは」

「いない。すっかり身軽ってわけさ」

「寂しいわね...」

「そんな身軽さって...なんだか空しいでしょ」

これは宇野に言ったことばですが、本当は、夕子の本心、夕子が、これほど自分の心情を外に漏らすのはこの編だけでしょう。

「...ごめんなさい」

「悪いこと、言ったわね」

と宇野の気持ちにも気づいて、素直に謝るのもこの編だけ。

宇野の方も「あつかましくて生意気な小娘」と思っていた夕子に対しての見方がだんだんと変化し...

「お尻ぶってやるって言ったでしょ」

「__ぶたれに来たの」

これは、この編の中でも、夕子の最も突飛な行動だと思いませんか、しかし、茶化した言い方でも、これまた夕子の本心から、それに気づいたからこそ、宇野も受け入れることができたのでしょ。



女子高校生夕子

女子高校生夕子

花の女子大生もいいけど、憧れのセーラー服も...

「馬鹿、おまえロリコンか？」

冗談はともかくとして女子高生の夕子に出会えるのが「知り過ぎた木々」（文春文庫、ノベルズ版もあり）これは「幽霊シリーズ」の番外編、当然ながら宇野は登場しない。

ここでの夕子の活躍は正に目を見張る。入り組んだ大人たちの人間関係から生じた殺人事件、マラソンの勝者でありながら記憶喪失になってしまった女生徒の謎、この二つの謎を解きながら、その生徒の世話をし、また、ある二人の男女にはキューピットの役目、更には、ヒロインに危機が迫ると必ず現れる白馬の騎士、この騎士の役まで果たすのだからこれはもう、スーパーマンいやスーパーギャルとしか言いようが無い。

ただこの物語のヒロイン、実は夕子では無い、夕子あくまでも黒子（探偵役）、そのため残念ながら夕子の素顔、日常の生活については、何も分からない、一人のはずの夕子はどこにいて？どこの学校に通っていたのか？（ある名門女子校の林間学校が舞台なのだが、夕子はその生徒では無い）ボーイフレンドは？

「制服は？」

「うるさい！」

一人っ子で親子三人の暮らしだった、しかし両親とは一年前に死別。

たぶん中学時代だろうが、家庭教師に学んでいた。

「夕子、成績が悪かったのか？」

「黙れよ、邪魔だ」

と、陰の声は無視して、家庭教師をつけてもらえるということは、かなり恵まれた環境で育ったのだろう。

他人から見た夕子

永井家とは遠い親戚だという折原一雄

頭がよく性格もとても素直で...もっとも、多少皮肉屋で、大人を小馬鹿にしているような...

「なるほど、だから宇野は苦労するんだ」

高校の女教師

可愛い顔立ち、しかし、その目には、どことなく大人びたかげが...まるでシャーロック・ホームズ、愉快的な子、憎めない子、変わった子、本当に不思議な子...

「高校生のくせに、『お酒はたしなむ程度です』と言ってるのだからなあ」

夕子の特技

鍵のかけてあるドアを開くこと。

「おいおい、そんなこと、どこで習ったんだ？」

最後にもう一つ夕子の超人ぶりを

夕子は、途中までだがマラソンのトップグループ、しかも3位で走っている、問題は距離ではなくてその速さ、女高生ランナーといえども成人のそれと変わりがない、その彼女らについて走るの、普通の女高生にとって容易なことではないはず、しかも特にマラソンに力を入れている学校で、その中でも選ばれた選手たちのトップにくっついて...その上に彼女は、途中までと言っても、疲れてリタイアしたのでは無いのだから...

「で、結局セーラー服には出会えなかったな」

「ああ、残念・・・機関銃持ってなくてよかった」



再び幽霊探し

「夕子が、自分の身を投げ出して、喬一を庇う、そんな感動的場面があるの、知ってるか？」

「そんなのあったかな？」

「『双子の家』では、火の中へ飛びこもうとする喬一を、夕子は抱きついて止めるらしい、でも、あれではなくて、本当に自分の身を投げ捨ててた。」

「幽霊候補生」、この作品だけはいただけない。

まずミステリーとして、探偵であるはずの夕子の推理も活躍もなし、宇野は単なる道化役、殺人は起こるものの本筋とは無関係。謎といえば、再会した宇野に夕子が嘘をつくところだろうが、夕子は本当に内藤家に入るつもりだったと見ない限り、これに対する納得できる理由が無く、夕子の冷たさだけが印象に残る。（この話は、要するに、ある悪人親子が、町の娘を誘拐監禁しました、でも五ヶ月後に釈放しました、めでたしめでたし。に過ぎないのですね）

ここでの夕子は馬鹿としか言いようがない、のみならず夕子の宇野に対する誠意ばかりか人格までも疑わしくなってしまう。（と言うことで、幽霊列車からの数編で抱いた夕子の好ましいイメージが見事に砕かれてしまうわけです。）

「命の恩人？」瀕死の女性を見つけたのなら、まず救急車もしくは病院へ、ところが何の設備もない田舎の民家に、そこで夕子は一ヶ月も生死の境をさまようことになる、現実のことなら殺されていただろう。（ところが夕子はそれに気づかない）

「男子学生を監禁している？」人一人監禁するには食事もある、いったい誰がいつ、まあ資産家の家、男性三人暮らしではないだろうからお手伝いさんも、そして夕子はそこの奥様なのに...（単純な嘘が見抜けない）

「夕子は外部に連絡しない...」夕子が活着ているのを宇野が知ったのは偶然、もしこの偶然がなかったら、夕子はどうするつもりだったのだろう...さらに宇野に再会した後でも自分からは連絡しようとしなない、「風呂をのぞいて、お猿さんのまね」これは五ヶ月ぶりに再開した恋人に言う言葉ではない、こうなるともはやユーモアではなくて冷笑でしかない。（宇野への誠意や人格が疑われるところ、夕子の死を悲しんだ者は宇野以外にもいただろう、しかし夕子はそんなことは全く気にしない...）

内藤親子が、五ヶ月にもわたって監禁していた夕子を、簡単に釈放したわけもわからない。宇野が来たから、しかし宇野が、何かをしたわけではないし、息子は、宇野の存在を夕子から聞いて以前から知っていた、夕子に悪いと思うのなら、もっと以前に父親を説得しているだろう

、何よりも本当に父親のことを思うのなら、最初から止めたはず、なぜなら、このまま続けさせれば、父親は、一生を犯罪者とし終えることになるのだから、これでは、親を思う息子の気持ちとは到底思えない。

ともかく読後の後味が悪い、本来なら夕子の機知気転によって脱出、せめて最後が宇野によって救われるのならこうはなっていなかっただろう...

と、勝手なことを書いてしまいました...



実はこれ、コミックの「幽霊候補生」 もしスコップが振り下ろされていたら、死んだのは夕子、このときの夕子を見て、初めて息子が反省する。このコミックは、私の疑問を、いくらか解決しているではないか。

原作とは違って「おやっ」と思ったところがもう一つ、原作の夕子は「可愛そうな人...」と、大塚に対してつぶやいているのだが、本当の被害者は、鈴木君の父親。このコミックでは「鈴木君のお父さんまで死んでしまった...私の責任ね」と言わせているのだ。その通り、元はと言えば内藤親子が悪いのだが、二人の命が失われた、この直接の原因は、間違い無く夕子に、特に鈴木君の父親を殺した責任は、完全に夕子に。もっと早く外部に連絡を取っていれば（夕子が馬鹿でないなら、簡単にできたはず）...大塚に、おかしい感情を持たせるような、接し方をしていなければ...いや、宇野や鈴木君の父親が来ていることを知りながら無視したのだから...

「ほほう、コミックも馬鹿にはならないじゃあないか」

これは、古書店で見つけた「赤川次郎幽霊シリーズセレクション」（原作赤川次郎、作画中原まい）というもの、他の本と一緒に、何気なく買ったもので、「なんだ漫画か」とそのまま投げ出していたものだ。

「漫画もまんざら捨てたものではないな、今度は、これも探してみるか」

「いい歳をしてコミックを...まあ、乗りかかった舟だ」

という次第で、コミックの作家たちがどう解釈しているのかを検証してみたくなった、またまた幽霊探しの開始...



夕子の顔は

夕子の顔は

「かわいらしい顔立ち」と言われたのは18歳、「なかなかの美人」宇野喬一、「すばらしい美人」原田刑事

TVドラマの浅茅陽子（のち藤谷美和子）は原作のイメージにぴったり、監督の俳優を選ぶ眼には、脱帽だが、さて「幽霊シリーズ」夕子の顔は？



左端は可愛いがこれは幽霊？山下昌也、中は佐伯俊男、右は現在も続いている峰岸達の夕子、佐伯俊男の作品が面白くて、私は好きだが、これは3から6までの4冊、峰崎のものもなんとなくほのぼのとした独特の味があって、これまた面白い。



続いてコミックの中の夕子を。左は松森正、中は中原まい、そして右が外崎コウで三者三様、原作のイメージに近いのは松森正か、中原まいの夕子は可愛いくていいが、宇野は若過ぎ、加えてすごいイケメン、これなら夕子に振られても、若い女性は引く手あまた...笑

「幽霊列車」（松森正 原作・赤川次郎 文春コミックス）

「赤川次郎幽霊シリーズセレクション」（原作・赤川次郎 作画・中原まい ぶんか社コミック）

「赤川次郎・高橋克彦・夏樹静子セレクション」（作画・中原まい他 ぶんか社コミック）
（ぶんか社の二冊は、別の「まんがこのミステリーが面白い」という雑誌に掲載されたものからの選ばれたもの）



コミックとなると、こんなのがいいな、これが外崎コウのもの、ただし全てがこのタッチではない。

殺しのない日

殺しのない日

「赤川さんはよく人を殺す」という書き込みのついたブログに出会ったことがある、確かに氏は、よく殺す（笑）
いったい何人？シャーロック・ホームズなら、シャーロキアンが数えているだろうが、暇な私でも赤川氏の殺しの数まで数える気は...

このブログは、「確か人が死なない作品が一編だけあると聞いたが、何という作品だろう？」と続いていた。一編だけかどうかは知らないが、間違いなく誰も死なないのが「夢の追加料金」（幽霊園遊会内）。

シャーロック・ホームズと言えば赤川氏には、例の三毛猫、それから鈴木芳子の第九号棟の中と、少々異色のホームズがいるのだが、これは真正ホームズにささげたオマージュ。

ホームズファンなら、宇野が「金のあるところまでトンネルでも掘るのか」と言うまでも無く、奇妙な手紙が届いた段階でピンとくるのだが、これは、ドイルの「赤毛連盟」。

「外で何かをさされたら、内では何かをされている」というミステリーの法則まで生み出した「赤毛連盟」は、続いているいろいろな団体や連盟を続々と誕生させた、例えば日本でも、「紫電改保存研究会」（島田荘司）や、何と「亀腹連盟」（松尾由美 これは妊婦さんのお腹）と言う楽しい？ものまで...

で、これは何同盟？同盟の名前は出ていないけど、苦学している若い女性に、どんな夢でもかなえてあげる、というのだから、まことに結構な組織？ただし一週間に一日だけ。まあ「即席シンデレラを作る会」。

「外で何かをさされたら、内では何かをされている」 さて内で何をされていたのかは...

「それにしても、宇野警部は、ポカンとよくやられる」
このシリーズで、殺される人の数と、彼が頭を殴られる数、どっちが多くなるんだろう？

（後で気づいたのですが、最新作「有終の美に消える」も、だれも死なないですね。）

必殺仕掛け人

必殺仕掛け人

跳びこみ用プールに女性の死体。監視員の友人に頼まれ駆けつけた片山は、事故として手配しようとするが、突然現れた謎の女性がこれは殺人だと断定、三毛猫ホームズもそれに賛同。というわけで、これは、三毛猫ホームズの中の一編なのですが、謎の女性こそ我が夕子（笑）「冬の旅人内、三毛猫ホームズの水泳教室 角川文庫」「三毛猫ホームズの用心棒内、三毛猫ホームズの水泳教室 カッパノベルズ」

夕子に犯人は分かるものの、証拠が無くて手が出せない、警察は事故として処理を終えようとする、が、やがて夕子は、三毛猫ホームズの助けも借りて、事件の全容を解明、「もう全て分かってるのだから、自首するように」と、片山を通して犯人に伝えさせる。

犯人が、自首に応じて去ったあとの二人の会話（原文通りではありません）

「しかし...あんなこと可能なのかな...（殺人トリックのこと）」

「不可能に決まってるじゃないの」

「えっ！じゃあ君はそれを承知で、僕にあんなことを言わせたのか？あの二人今ごろ僕のことを笑ってるぞ、畜生！」

「そう怒らないで」

と、片山に話させた事件の全容というのは、夕子が犯人に仕掛けた罠だったのです、こう言う仕掛けは夕子の得意技、近代科学で幽霊の話や聴くという怪しげな機械が表示した犯人の名前と、実際の犯人が一致して宇野は驚くのですが、「私が、あの名前が出るよう頼んでいたのよ」「幽霊愛好会」「幽霊心理学」では、話の全てが夕子制作のお芝居、犯人までが夕子のドラマのキャストになって...知らぬは宇野と原田だけ。

犯人に、ではなくて宇野に仕組んだのが「幽霊法廷」。というとネタばらしになるのですが、このシリーズを読んでいる方はすぐ気づくでしょう、私のような鈍いものでも途中で気づいたのですから。

これはシリーズ唯一の長編、長編だけにストーリーの進め方もなめらかで非常に面白い。プロローグはちょっとショック。ここで夕子にお見合い話が、宇野と、すっかり夕子が気に入ったお見合い相手との、夕子を巡る争奪戦、これはなんと決闘騒ぎにまで発展するという、まあ馬鹿げたおまけも付いていますが。（笑）

ところで宇野に仕掛けた夕子、夕子自身もまた別の仕掛けのネタにされているのですが...それはともかく、やがて宇野を悩ませた事件の真相も分かって大団円、

「これにて閉廷...」

と、夕子の言葉で無事終わり。

「おいおい、ちょっと待てよ」

ユーコジアンから一言、

「夕子、それは酷いぞ！」

「初めから仕組んだんだな！」と怒る宇野に

「あなたのためよ」と言ってしまうたら、これはもう恩の押し付け、踊らされた宇野が惨めでかわいそう。

「それ言ったら、終わらないじゃないか」

「いや、夕子は謝るだけでいいし、宇野は好きなだけ怒ればいいんだ、そのうち夕子の行為は自分のためだったのだと気づくだろう」

「宇野には怒りたいだけ怒らせておく、それが思いやりのある女性に、宇野も怒るときは怒る、そう、それでこそ警視庁

捜査一課のオニ警部、というわけで本当の大団円」

夕子の謎

ここでは少しシャーロキアン的にあるブログの書き込みで、「夕子は生活費をどうしてるんだろう？」というのがありました、確かに不思議不思議（笑）、彼女は大学生、日々の生活費のみならず学費も必要なはず、家庭教師のアルバイトはしているようですが（裏切られた誘拐、ライオンは寝ている）それだけで到底まかなえるはずはない、ところが学費や生活費などどこ吹く風で大学生活を楽しんでいて、なんと宇野の財布の中まで補充しているのですから（巷に雨が降るごとく）それはともかく彼女の履歴や親族を...（見落としがあるかも）

履歴

- ・ 1958年生まれ（宇野に出会ったのが1978年21歳の時から推測、月日不明たぶん6月）
- ・ 家庭教師に指導を受ける（中学時代と推測）
- ・ 17歳両親死亡（自動車事故、両親の名前不明）
- ・ 18歳高校三年生（遠い親族という折原家でお手伝いさん代わりにこき使われていたらしい）
- ・ 19歳T大文学部に合格（高三の夏は不勉強なのに、さすが夕子）
- ・ 20歳T大二年生（新聞部、三毛猫ホームズと片山刑事に出会う）
- ・ 21歳T大三年生（岩湯谷温泉で宇野警部に出会う）
- ・ 21歳T大三年生（半年振りに宇野と再会）
- ・ 22歳T大四年生（内藤親子に誘拐監禁され卒業できず）
- ・ 2013年現在もなお22歳、T大留年のまま（笑）

親族

永井俊之・・・叔父、17歳で両親を失った夕子の後見役、最も夕子に好意的。（幽霊候補生）

永井珠子・・・叔母、九州に住んでいる。（幽霊法廷）

折原一雄・・・遠い親戚、大企業の幹部、両親を失った夕子はしばらく折原家にいた？（知りすぎた木々）

折原待子・・・一雄の娘、夕子と同年齢、幼いころは夕子と仲良しだったというが...（知りすぎた木々）

谷本 修・・・叔父、破産して死んだことに、葬儀まで出してもらっているが生きていた。（幽霊待合室）

こうしてみると夕子の親族は意外と多いのですね、叔父や叔母にも子どもがあるだろうから、当然従兄弟達もいるだろうし...親族をだましていた谷本叔父に対して夕子は厳しいのですが、これは夕子も同じこと、あまりこの叔父を責める資格は？夕子自身宇野だけでなく親族のことなど

一切考えずに、内藤京子になりすまして平気でいたのですから... (幽霊候補生)

夕子最大の謎

岩湯谷で宇野と結ばれたとき、宇野は「私が初めての相手ではなかった」と言っている...では、夕子が最初に身を許した男性は？

- ・ 18歳の時元家庭教師の大学助手と再会、しかし特別な発展は見られない、夕子は彼のキューピット役。
 - ・ 「昔の恋人を忘れたのか」と言う男性が登場 (同情買います)、しかしこれはこの男性安田の冗談で、単なる先輩後輩の付き合いに過ぎなかったようだ。
- となると、夕子の最初の恋人は???

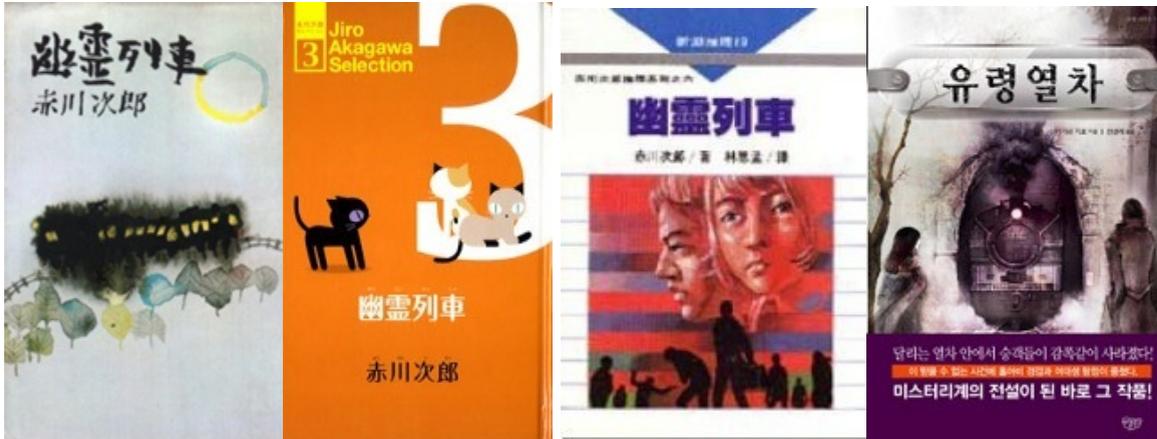
カバーとコミックの夕子を紹介しましたが、右は大学二年生の夕子。かっこいいのですがこの後プールに落ちてずぶ濡れに... (笑)



ベストとワースト

ベストとワースト

夕子と宇野の100話を超える事件の中でベストとワーストを（あくまで独断と偏見ですが）



左から単行本、児童書、右は台湾版と韓国語版

ベスト1はなんと言っても「幽霊列車」、いやトリックや謎など、もっと面白いものもあるのです、ところが「幽霊列車」の無邪気な夕子がいなくなってしまうのですね、例えば最新作の「有終の美に消える」、宇野が「大事件にならなくてよかった」と言うのに対して夕子は「人が変わるといのは大事件よ」と何か悟ったようなことを言うのですが、無邪気に「つまらなかったわ」と言う夕子でいてほしかった...

「双子の家」「巷に雨の降るごとく」「あおひげよ我に帰れ」などもいいですね、一軒の家だと思っていたら二軒だったというミステリーはよくあるのですが、二軒だと思っていたら一軒というのは初めて読みました、「あおひげ・・・」は簡単なトリック、簡単なだけにより面白い。

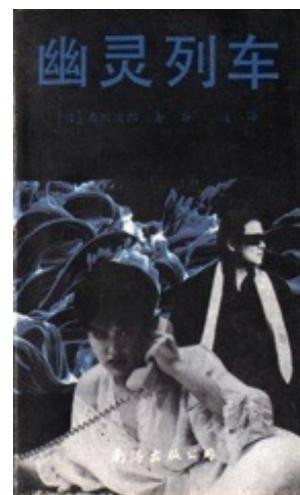
ワースト1、これは何度も述べた「幽霊候補生」探偵を被害者にしたために、夕子は何もできなくなってしまった、夕子の推理や活躍を期待して読んだ読者は見事裏切られてしまう...「次は「幽霊法廷」でしょうか、ここでの夕子は酷い、友人の頼みのために宇野をだまして利用しているのですから、「貴方のため」とか「私のためでなく貴方自身のために」などと夕子は盛んに言っていますが、結局宇野は夕子のために働いたのですね、だます必要はどこにもない、しかも夕子はお見合いをして、宇野の反応を楽しんで...実に性悪女（笑）シリーズ唯一の長編だけにこれは残念。

「幽霊待合室」、数年前に死んだはずの夕子の叔父が夜の列車の待合室に...これは「幽霊列車」で8人が消えたのと同様な凄い謎です、だから一捻りも二捻りもした展開が...と期待していたらこれまた見事肩透かし、これなら夕子の叔父にする必要はどこにも...

「赤川さんの話は、あれこれ詮索するよりそのまま楽しむべきではないですか」という意見を

聞きました、その通りで賛成です。善人村でヘリコプターにぶら下がろうと、ライオンを飼う家で留守番をしようと、これぞ赤川ワールド、親が子を殺す話もあれば、子が親を殺す事件もある、それでも抵抗無く楽しめるのが幽霊シリーズ。ところが「幽霊候補生」と「幽霊法廷」だけは読後の後味が悪い、これは何故でしょうか???

右図は中国語版「幽霊列車」（簡体字版）



二人は結婚するか

二人は結婚するか

宇野と夕子は結婚するか？

実は海の向こうにも、よく似たコンビがいるのです。ただし異なる点が二つ、その一つは、男性が、なんとあのシャーロック・ホームズ、一方のメアリー・ラッセルは、夕子と同じ大学生、ホームズを驚かせた、鋭い観察力と推理力の持ち主ということも、夕子と似ているだけでなく、勝気で、うぬぼれ屋で、皮肉屋であることも（笑）、また彼女も両親を失っている。ただし、相手はホームズ、夕子が宇野を繰るようにはいかず、二人の間は対等のパートナー。

この二人ならもう最強、しかし二人にも、さまざまな危機が訪れる、夕子が内藤親子に監禁されたように、メアリーも悪党により長期にわたって監禁をされる、これは本当の監禁で、あわやメアリーは麻薬中毒者に...もちろんそれを助けたのはホームズだが、別の事件では、ホームズの危機をメアリーが救う。

二つめの相違点は、二人はやがて結婚をすること。二人の最初の出会いは、ホームズ54歳、メアリーは15歳のときで、ホームズはすでに養蜂家になっていた、二人の年齢差はなんと39歳！数々の危機をくぐり抜けて心を通わせた二人にとって、歳の差など、問題ではなかったのだろう。

（宇野警部殿、20の差などメジャーなイゼ）

（ただメアリーが何歳のときの結婚かは、ちょうどそれに当たる頃の本を紛失しているので分からない。手元に残っているシリーズ七冊め「疑惑のマハーラージャ」ではメアリー24歳、既に結婚後の事件になっている。このシリーズ、杉原爽香と同じように歳をとるのです）

「シャーロック・ホームズの愛弟子シリーズ」（ローリー・キング 訳山田久美子 集英社文庫
これは長編の連作）

ところでこの二人の結婚について、「独身の男女が愛し合うと、結婚して当然、何か特別な理由、男性が戦場に行く、とでも言うことがない限り、いつまでも結婚をしない交際は、愛では無く、単なる肉体の結び付き、不倫とはまた別だが、やはり倫理に反する行動と見なされるのが、キリスト教の国だ」という話を聞いたことがあります、宇野と夕子にとっては耳の痛い（いや宇野にとっては嬉しい）話ですが、これは本当でしょうか？そう言われると、確かに海外物で、恋人のままの探偵というのは、なかなか思い浮かばない（ありそうですが）、男女のコンビと言うことで、トミーとタペンス（アガサ・クリスティー）を思い出したのですが、これもオシドリ夫婦...。日本なら独身同士、森博嗣のSMシリーズ犀川と萌絵など、そう珍しいことではないのですが。

本題に返って、宇野と夕子は結婚するか？

「おとなりも名探偵」（角川文庫）の解説で、山前譲氏は、「赤川作品には今野淳一と真弓という夫婦探偵のシリーズもありますから、絶対に結婚しないとは断言できませんが」と書いている

、しかし私は断言していいと思います、なぜならば、結婚すると、夕子は、宇野の嫉妬心を利用して彼を壊れなくなってしまうから（笑）、冗談を抜きにして「しそうで、しない...これによって読者は気をもみ、ハラハラと...」というのはミステリーに限らず、日本の作家の常套手段。だが同時に、二人は決して別れることもないでしょう、別れてしまえばそれで終り。「死が二人を分かつまで」と言いたいところですが、この二人は爽香のように歳はとらないので、「二人の愛は（腐れ縁？）は永遠に...」



中国語版ですが、「二人の愛は（腐れ縁？）は永遠に...」に相応しい表紙（笑）

コミックの「幽霊候補生」原作の冷たい夕子と違って、身を持って宇野を庇うということは先にも書いたのですが、宇野の方も原作のような道化役だけではないのです、「家宅侵入だ」という父親に対して「何を言う、おまえらこそ監禁罪だ」と断罪し、大塚に殴られながらも最後は見事な一本背負いで投げ飛ばす。「あおひげよ我に帰れ」では、「わたしが信用できないの」となじる夕子に「おまえこそ黙ってたのは俺が信用できないからだろう」と言い返して夕子を慌てさす。また夕子も結構意地悪、原作の夕子は「巷に雨が降るごとく」で彼女に好意を持った男子学生に「友達として交際できても恋人は宇野一人です」とはっきりと断り、「あおひげよ我に帰れ」では、青髭と言われる男に近づいたわけを最初から宇野に話しているのですが、コミックの夕子は、ともに最後まで宇野に焼きもちを焼かせて楽しんでいるのです。まあこれがコミックの面白いところでしょう、また同じコミックでも作者によってまた違ってくるのも面白い。

●松森正の「幽霊列車」（文春コミック、文芸春秋社）

夕子も宇野も原作のイメージに近く、絵も非常にうまくて分かり易い、夕子と宇野の心の触れ合い、これもきちんと抑えてある、ただし大事な伏線「ハンカチ貸して」を落としているのはちょっと、それから「おしりをぶたれにきたの」も省略、これは四話のみで完成した一冊の本としたためらしい。（幽霊列車、ダイニングメッセージ・幽霊記念日の改題、双子の家、善人村の村祭り）

●中原まいの「幽霊列車」（幽霊シリーズセレクション、文化社）

夕子は可愛いが宇野は若過ぎと前に書きました、この二人、他の話ではまあいいのですが、「幽霊列車」には少々ミスマッチ...少女マンガなので仕方がないのでしょうか、二人の心の触れ合いの場面も今一、ここでは足を滑らせた夕子を宇野が助けることになっている、で、二人が結ばれるところはバッチリ、（これぞ少女マンガ 笑）そして二人で宇野の亡き妻の墓へ、これには驚き。

●松森正の「双子の家」（同上）

なんとここで二人が再会することになっている（本当の再会は「裏切られた誘拐」）で、問題は二人が一つのベットに入るところ、夕子が気を持たせ、宇野は慌てて「俺はソファで寝る」、結局、二人が眠らないうちに火事が、（幽霊列車で結ばれてないのですからこれは当然、それなのに仲良く善人村へ旅行とは...?）

●外崎コウの「双子の家」（赤川次郎・高橋克彦・夏樹静子セレクション ぶんか社）

さらりととぼけていて面白い、上記ベットシーン、寝相の悪い夕子に蹴られて宇野が目覚めるのは原作の通り、「もう一眠り」といいながら宇野は夕子にかぶさっても...笑 この作者の幽霊シリーズもっと見たいのだが残念ながらこれ一作だけ。

「——你是雜誌記者嗎？」

「我？不是，我還是學生。」

「幾？」

「二十一。」

「名字呢？」

「永井夕子。」

「你在貨車裡面幹什麼？」

「手帕借一下，好吧？」

「什麼？」

「手帕！」

「喔——」

我們再向「濛濛莊」走去。

話は変わって、上は「幽霊列車」台湾版の一部。「雑誌記者か?」「いいえ、学生よ」・・・「貨車の中で何していた?」「ハンカチ貸してくれない」「何?」「ハンカチよ」

台湾でも赤川次郎は人気なのですね、ここでは「三毛猫」より「三姉妹」が好評のようです。夕子では「幽霊列車」の他に「あおひげよ我に帰れ」「名探偵の子守唄」などを入手しました、と言っても台湾から取り寄せるほどのめりこんでいるわけではなくて、台湾YAHOOで検索、TXTをダウンロードしたものです。(ただし止めておいた方が、ウイルスがウジャウジャ)



台湾の幽霊って凄いですね、角が生えていて...下は題名の比較です、見慣れない漢字があるの
で画像に直しました。

「幽霊」系列

- 01 幽霊列车:幽霊列车(幽灵列车)◆裏切られた誘拐(背叛的绑架)
◆冻りついた太阳(结冻的太阳)◆善人村の村祭(好人村祭典)
- 02 幽霊候補生(幽灵候选生):幽霊候補生(幽灵候选生)◆双子の家(双胞胎的家)
◆ライオンは寝ている(狮子在睡觉)◆巷に雨の降ること<(巷子好象要下雨)◆眠れる棺の美女
- 03 幽霊愛好会(幽灵同志/幽灵同好会):名探偵の子守唄(名侦探的催眠曲)
◆青ひげよ、我に帰れ(蓝胡子, 现出原形吧!)◆赤い靴はいていた女の子(穿红鞋的女孩)
◆コウノトリは本日休業(送子鸟今天休息)◆杀された死体(被杀死的体)◆幽霊愛好会(幽灵同好会)
- 番外編 知り過ぎた木々(森林学校疑云 惊魂)
- 04 幽霊心理学(幽灵心理学)
- 05 幽霊湖畔(幽灵湖畔)
- 06 幽霊園游会(幽灵游园会)
- 07 幽霊纪念日(幽灵纪念日)
- 08 幽霊散歩道(杀人小雨)
- 09 幽霊劇場(玩偶的错杀)
- 10 幽霊社员(地下道杀局)
- 11 幽霊教会(幽灵教会)

作品リスト

作品リスト

本編

1. 幽霊列車（1978年6月 文藝春秋 / 1981年8月 文春文庫）
 - 幽霊列車 / 裏切られた誘拐 / 凍りついた太陽 / ところにより、雨 / 善人村の村祭
2. 幽霊候補生（1979年10月 文藝春秋 / 1982年10月 文春文庫）
 - 幽霊候補生 / 双子の家 / ライオンは寝ている / 巷に雨の降るごとく / 眠れる棺の美女
3. 幽霊愛好会（1983年6月 文藝春秋 / 1985年7月 文春文庫）
 - 名探偵の子守唄 / 青ひげよ、我に帰れ / 赤い靴はいた女の子 / コウノトリは本日休業 / 殺された死体 / 幽霊愛好会
4. 幽霊心理学（1986年2月 文藝春秋 / 1988年7月 文春文庫）
 - 影のような男 / 美女は二度殺される / 幸福なる殺人 / 銀座の殺しの物語 / 幽霊心理学
5. 幽霊湖畔（1988年8月 文藝春秋 / 1991年8月 文春文庫）
 - 幽霊湖畔 / 着せかえ人形の歌 / 危い再会 / 吸血鬼を眠らせないで / 狼が来た夜
6. 幽霊園遊会（1992年2月 文藝春秋 / 1994年5月 文春文庫）
 - 他人の空似にご用心 / 英雄の誇り / 夢の追加料金 / 幽霊園遊会
7. 幽霊記念日（1992年8月 文藝春秋 / 1995年2月 文春文庫）
 - 幸い住むと、ポチが鳴く / 白鳥の歌を聞くとき / 幽霊記念日 / 裏の畑でミケが鳴く
8. 幽霊散歩道（プロムナード）（1993年10月 文藝春秋 / 1995年9月 文春文庫）
 - 幽霊散歩道 / 殺人犯、お呼出し申し上げます / 危ない参観日 / 小雨に濡れた殺人
9. 幽霊劇場（1995年2月 文藝春秋 / 1997年4月 文春文庫）
 - 同情、買います / 夢路、はるかに / 幽霊劇場 / 間の抜けた告白
10. 幽霊社員（1996年2月 文藝春秋 / 1998年5月 文春文庫）
 - 週休四日の男 / 幽霊社員 / 行きずりの人 / 我輩は忠実なり
11. 幽霊教会（1997年2月 文藝春秋 / 1999年3月 文春文庫）
 - わが子可愛や / 人生相談は今日も行く / 父さん、お肩を... / 幽霊教会
12. 幽霊結婚（1998年3月 文藝春秋 / 2000年4月 文春文庫）
 - 幽霊聖夜（クリスマス） / 幽霊結婚 / 面影は消えず / 生命（いのち）のバトン
13. 幽霊暗殺者（1999年2月 文藝春秋 / 2001年3月 文春文庫）
 - 星をつかまえる / 爽やかな追跡 / 幽霊暗殺者 / 裸で始まる物語
14. 幽霊指揮者（コンダクター）（2000年3月 文藝春秋 / 2002年3月 文春文庫）
 - 幽霊指揮者 / 私の秘密はあなたの秘密 / 幽霊放浪記 / 仮面の心中 / 影のある男
15. 幽霊予言者（2001年6月 文藝春秋 / 2003年6月 文春文庫）
 - 悪魔は微笑む / 幽霊予言者 / 小さな、小さな眠り / 恋の予感にご用心 / 遠くて近い恋人

たち

16. 幽霊温泉（2002年10月 文藝春秋 / 2004年6月 文春文庫）
 - 自由をこの手に / 生きるべきか、死すべきか / 幽霊温泉 / 聖者が街へやって来る / 見えない鉄格子
17. 幽霊博物館（2004年4月 文藝春秋 / 2006年2月 文春文庫）
 - 幽霊博物館 / 海より深く / 火葬場の煙はななめに上る / 見知らぬ人への挽歌 / 旅路の終り
18. 幽霊包囲網（2005年8月 文藝春秋 / 2007年10月 文春文庫）
 - 幽霊包囲網 / ママの選択、パパの洗濯 / つきに見放された男 / 都会の死体置場（モルグ） / 私は目撃者
19. 幽霊相続人（2007年7月 文藝春秋 / 2009年11月 文春文庫）
 - 噂をすれば思い出す / 幻の相続人 / いざ歌え、歓喜の歌 / 河は呼んでる / 明白な殺人者 / 立ち聞き、また聞き、盗み聞き
20. 幽霊法廷（2008年1月 文藝春秋 / 2010年10月 文春文庫） - シリーズ初の長編
21. 幽霊待合室（2009年8月 文藝春秋 / 2012年1月 文春文庫）
 - ジュリエットは真夜中に目覚める / 雪女によろしく / 幽霊は生きていた / 愛に渴いて / 灰色の人生 / 幽霊待合室
22. 幽霊晩餐会（2010年3月 文藝春秋 / 2012年8月 文春文庫）
 - 明日に生きた男 / 息子と恋人 / 良妻賢母の詩 / はじめの一步... / 灰もまた燃える / 幽霊晩餐会 / タダより安く
23. 幽霊注意報（2011年11月 文藝春秋）
 - 裏切った弾丸 / 運命の糸車 / 幽霊注意報 / 正義はわが旗印 / 深い海の記憶 / 赤信号を渡れ / 北へ帰る女
24. 幽霊恋文（2013年 9月 文芸春秋）

○ 呪いの特売 / 密室は明日から / 落ちた偶像 / 失われた音楽 / ハイキングもまた楽し / 有終の美に消える / 幽霊恋文

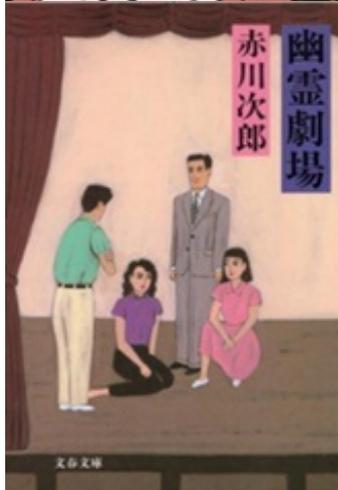
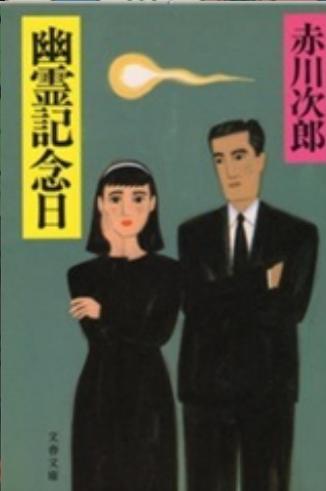
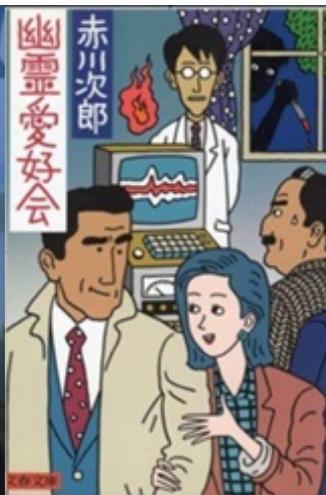
犯罪買います「オール読み物」（2013年8月号）

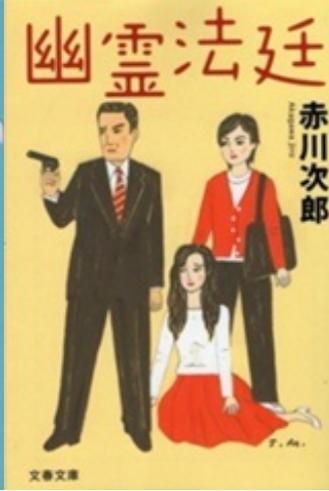
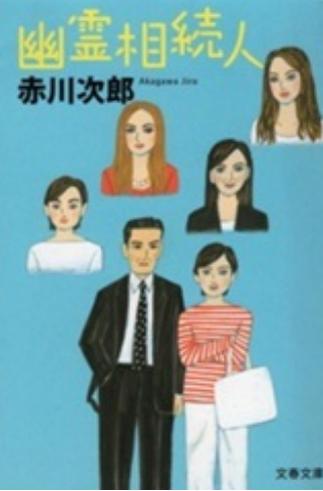
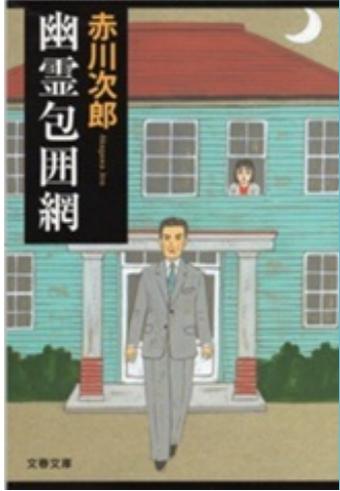
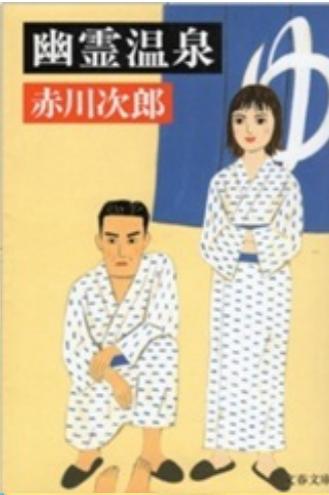
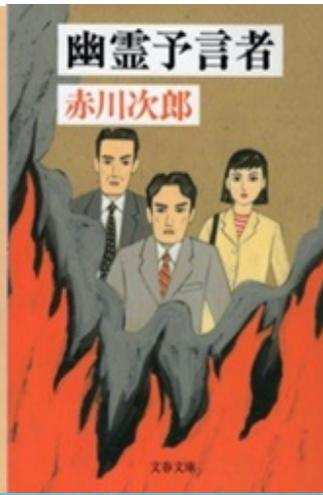
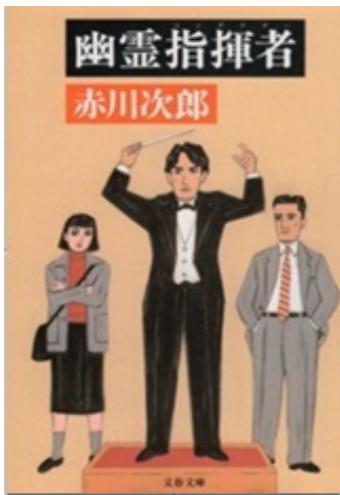
番外編

- 『冬の旅人』（1981年9月 大和書房 / 1986年3月 角川文庫） / 『三毛猫ホームズの用心棒』（2009年12月 光文社カップ・ノベルス）
 - 三毛猫ホームズシリーズとの共演作品「三毛猫ホームズの水泳教室」を収録
- 『知り過ぎた木々』（1985年3月 文藝春秋 / 1987年2月 文春文庫） - 永井夕子の高校生時代の物語
- 『おとなりも名探偵』（2000年7月 角川文庫） - 三毛猫ホームズシリーズ・三姉妹探偵団

シリーズ他、赤川のシリーズ作品とのオムニバス短編集

- 「幽霊親睦会」を収録





おわりに

ここパパー、いいサイトですが初めてなので使い方がよく分からない、そのため体裁の悪いものになってしまいました。

いつもいじめられるのは宇野警部ですが、夕子がちょっとかわいそう、と思ったのが二編、一つは「知り過ぎた木々」、ここでの夕子は専らいいこ。大活躍ですが、夕子が一人ぼっちなのをいいことにしてか、遠い親戚だという折原に、うまく使われ、一度しか無い18歳の夏を、自分のために過ごすことができないでいる、何歳の夏でも一度しかないのですが、18歳というのは高校時代最後の夏、だいじな夏なのです。事件は解決、一応充実した夏ではあったでしょうが、ここでの献身的な活躍は、やはり両親を失った寂しさを隠すための...幽霊列車はこれから二年後、それでもまだ心の傷は癒されていないのですから、ひたむきな活躍が却ってかわいそうになる。(夕子の後見役は、伯父の永井俊之ではなかったのかな...)

二編めは「幽霊候補生」、いや誘拐や監禁をされたからかわいそうだと言うのではないのです。ここでの夕子は徹底して馬鹿として描かれている、だから何の推理も活躍もできない。だいたい男子学生を監禁しているという嘘など、先にも書いたのですが、誰にだってわかるでしょう、人一人を監禁するには、食事だっているのです、誰が、何時これをつくって...ところが夕子は、事故から5ヶ月も経つのに、湖で死体を捜している、しかも夜、堆積物が多くて遺体発見は困難と言われている湖で...それに宇野に再会した後の夕子の態度、これでは夕子の、宇野への愛情は疑わざるを得ない...

あっ、これらはあくまでユーコジアンとしての見方、赤川さんの意図とは、全く関係ありません。

100編を超える「幽霊シリーズ」みな面白かったのですが、残念だったことが一つあります、それは「幽霊列車」の夕子、皮肉やで、うぬぼれやで、それでいて本心もちょっぴりは覗かせる、鋭い推理力を持ちながら無鉄砲で無邪気そのもの、あの夕子に、その後はほとんど出会えなかったことです。頼りにはなるが、ずっと年上、訳知りのお姉さんという感じですね、あの天衣無縫の夕子にもっと会いたかった...



幽霊愛書会

<http://p.booklog.jp/book/67254>

著者 : tontokaimo39

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/tontokaimo39/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/67254>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/67254>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ